

# ピア・サポートを活かした協同学習

## Peer Support Program for Cooperative Learning

池島 徳大\*

福井 淳也\*\*

奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程\*

大阪市立淡路中学校\*\*

Tokuhiho Ikejima\*

Atsuya Fukui\*\*

School of Professional Development  
in Education, Nara University of Education\* Osaka Municipal Awaji Junior High School \*\*

<あらまし> 本研究では、ピア・サポートプログラムを英語学習の前半に導入して、生徒相互の人間関係を深めながら協同学習（ペア学習）に取り組んだ。その結果、人間関係の構築力など社会性を育むピア・サポートプログラムを活用することで、協同学習（ペア学習）がスムーズに行われ、対人的適応、学習的適応などの適応次元における効果が示唆された。反面、ペア学習を進めるにあたって、生徒の学力差に配慮したペアリングを行うことが重要であることが示唆された。

<キーワード> ピア・サポート 協同学習 ペア学習 親和的な人間関係づくり 学びの共同体

### 1. 問題

ピア・サポートは、子どもたちのもっている「人のためになることは進んでほしい」という、子どもの自然な援助資源（リソース）を活用し、「自分はこのために役立っている」という自己有用感や自尊心を高めていくプログラムのひとつである。

現在、ピア・サポートに関する取り組みが、全国の学校で取り入れられ始めているが、総合的な学習の時間や道徳・特別活動の時間に導入する傾向が高いように思われる。しかし、よく考えてみると、学校の教育課程で一番多くの時間が割かれているのは各教科の時間である。その時間に、「分からないところ」を出し合って、学び合い、教え合いがスムーズに行われれば、子どもたちの学びはさらに深まる。

だが、現在の学校教育現場では、今述べたこととは反対に、ただひたすら先生の話の話を聞くといった一斉指導スタイルが大半を占めているといつてよい。子どもたちは、黙って教師の話を聞くだけで、自由に自分の考えを表現する機会を奪われている状況にあるといつても過言ではない。この傾向は、特に中学校期に多いように思われる。教育現場は非常に多忙であるため、そのような状況に陥りがちであるが、子どもを「常に教えられる存在」から解放し、子ども同士が胸襟を開いて共に学ぶ存在となるよう、授業方法を検討していく必要がある。

#### 1.1. 学びの共同体としての協同学習

ところで、佐藤（2000）は、学びの共同体による協同学習を提唱している。協同学習では課題に対して「学び」を起こさせ、学習に対して積極的に取り組む姿勢を高めようとする。そのことが学力をつける要因となり、結果として学力が向上するという。

しかしながら、現実問題、授業において協同学習が成立しないこともあり、この授業形態を導入することに困難を伴うことも少なくない。この要因として考えられるのは、協同学習を導入するとき、グループ（共同体）の人間関係が十分にできておらず機能していないことがあげられる。学習グループ内の人間関係が良く、教え合いや相談、褒め合う姿勢が起こってくれば学習意欲も高まり、授業内で「学び」が発生するであろう。しかし、人間関係がうまく機能しないときには、協同で学習する姿勢すら生まれず、学習目的から外れた子どもたちが勝手なおしゃべりをして終わってしまうことも少なくない。

協同学習では、わからないことを「わからない」と安心して表現できる、そのような関係が目指されるのである。安心・安全な人間関係であってこそ、自由に表現し、学習に取り組めるのである。授業を通して人間関係が高まり、学習に対する前向きな姿勢ができることが、学力向上につながっていくので



ある。

## 1.2. 生徒同士の親和的な人間関係が土台となる協同学習

協同学習は、生徒同士の親和的な人間関係が土台となる学習形態である。協同学習の中では、コミュニケーションは自発的であり、課題を解決するために積極的なコミュニケーションが必要とされる活動である。

中嶋(2000a)が述べるように、協同学習は単純に教え合いや、演習をおこなうものではなく、課題設定が議論を必要とする内容であればあるほど、コミュニケーションはより盛んになり、「協同学習が行われる共同体では、お互いの意見が受け入れられ尊重される(中嶋 2000b)」のである。

## 1.3. 協同学習における学びが成立する要件

佐藤(2000)は教室に学びが成立する要件として、次の3つを設定している。以下にまとめて紹介する。

①「観察し、調査し、実験し、討議し、表現する具体的な作業が授業に置いて組織されなければならない。」②「他者の多様なアイデアを積極的に受容し、自らのアイデアを惜しみなく提供して学びあう『互恵的な学び(reciprocal learning)』が追求されるべきである」③「知識や技能を『表現』と『共有すること』をとおして、子どもは知識や技能を反省的に吟味し確かなものとする」との3点である。

また、中嶋(2000a)は、「生徒たちが本当に楽しいと感じるのは、言っていることが分かった時や自分の言いたいことが伝えられた時だろう。」と指摘し、「『学習活動(skill-getting)』と『言語活動(skill-using)』がバランスよく準備されてこそ、『わかった!できた!』という喜びを感じとるようになる。」と述べている。また、「『言語活動』をタスク(課題)として年間計画に位置付け、使いながら学んでいけるようにする。」と述べ、授業での課題設定の重要性を指摘している。

そこで本研究では、以下を研究目的とした。

## 2. 研究の目的と方法

本研究では、次の2つを目的とした。

(1)協同学習をおこなう際に、ピア・サポートプログラムを授業に導入して、コミュニケーションの質を高め、生徒同士がコミュニケーションする機会を多く確保し、学習効果のある支援策を検討する。

(2)その効果を、心理測定用具などを使って測定し、学級での満足度や学習的適応、対人的適応の側面から考察する。

## 3. 授業実践

### 3.1. 授業実践の対象学級

A 中学校2年生 B 学級、35名(男18名、女17名)。

### 3.2. 指導者

第2著者(教職経験13年の英語科担当教員)の他に、ティームティーチャー(第2著者が勤務する学校のC教諭<女性>)とD講師<男性>の3名が担当する。3人のいずれも対象学級の担任ではない。週3時間のうち2時間はC教諭と、1時間はD講師とのティームティーチングで実施。第2著者は、第1著者からピア・サポートトレーニング等について、1年間スーパービジョンを受けている。

### 3.3. 授業実施時間及び1単位時間の構成

2011年5月第2週以降、毎週3時間の英語の授業時間、計16時間実施。1単位時間は50分。

### 3.4. 授業実践する授業とその単元

<使用する教科書>NEW CROWN(中学校2年)三省堂

<単元>①Lesson 2 School Web Report, Do It Talk 2(第1時~第8時)②Lesson 3 At the Zoo, Do It Talk 3(第9時~第16時)

### 3.5. 協同学習を進めるペアづくり

中嶋(1997)が述べるように、共に学習するペアとの人間関係は極めて重要である。英語教授法の手法であるロールプレイを行う際にも、生徒同士の関係が悪ければ課題と一緒に取り組めず、学習効果に大きな影響を与えることにもなる。

そこで、生徒同士の人間関係を形成していくことが重要だと考え、ピア・サポートプログラムの説明と同時にペアづくりを行った。ピア・サポートのワークを通して、生徒たちは実に多くのペア体験をすることになった。その結果、比較的スムーズにペアをつくることできるようになってきた。その時点で、指導者が協同学習を実施するペアを選定した。ペアがうまく作れない場合には、本人の合意を得るため、当該生徒と話し合う機会も設けた。このような機会をつくることは、生徒の気持ちを受け止めていることを示すものであり、ペア同士で行う協同学習に対する信頼にもつながっていくものと思われる。なお、ペアは男女別のペアリングを行い、ペアが作れない場合には3人組とした。

### 3.6. 単元及び指導内容

表1に、単元及び指導内容を示す。本授業を進めるために、次の2つをモジュール学習として導入し展開した。

#### ①ピア・サポートプログラムの導入(＃1~8)

各時間とも、初めの10~15分程度、ピア・サポートのスキルトレーニングを導入。後の35分はペアワークを中心とする協同学習を行った。ただし、＃1のみ、ピア・サポートのスキルトレーニングを35分間実施し、後は協同学習を行った。

#### ②ペアワークを取り入れた協同学習(＃1~16)

ペアワークを取り入れながら音読ワークは必ず実施



した。

表1 単元及び指導内容  
(○数字は、モジュール学習の内容を示す。)

#	単元・内容
1	①学習とピア・サポート導入の説明とペア作り ②be 動詞過去形肯定文解説 ②ペアで新出単語の確認演習。一人が出題者、もう一方が解答者となる。適宜、交代。(単語ワーク)
2	①傾聴スキル(3つの聞き方をロールプレイ後、その違いを考えさせる) ②be 動詞過去形の演習として、ペアで協力して解答(ペア演習) ②ペアで本文の音読ワーク。一人がモデル、もう一方がリピートを行う。(音読ワーク) ②本文の意味確認としてペアで協力して日本語に訳して黒板に書く(本文板書)
3	①傾聴スキル(FELLOW モデルの提示) ②本文の音読ワーク(be 動詞過去形疑問文の解説とペア演習、新出単語の単語ワーク)
4	①傾聴スキル(FELLOW モデルのロールプレイ) ②be 動詞過去形疑問文のペア演習。(本文の音読ワーク、本文板書)
5	①プラスのストロークの説明とワーク ②本文の音読ワーク(過去進行形と接続詞 when の解説をペア演習) ②新出単語の単語ワーク
6	①プラスのストロークになる言葉探し ②過去進行形と接続詞 when の解説とペア演習 ②音読ワーク。本文板書 ②本文の登場人物の気持ちをペアで考え発表することで、本文の理解を深める
7	①ALS の法則の説明 ②疑問詞 how の解説とペア演習。新出単語の単語ワーク ②本文の音読ワーク
8	①協同学習での「ALS の法則」の活用 ②疑問詞 how のペア演習 ②本文の音読ワーク
9	②助動詞 will 肯定文の解説。ペア演習 ②新出単語の単語ワーク ②本文の音読ワーク
10	②助動詞 will 肯定文のペア演習 ②本文の音読ワーク ②本文板書
11	②ペアで本文の音読ワーク ②助動詞 will 疑問文の解説とペア演習 ②新出単語の単語ワーク ②本文の音読ワーク

12	②助動詞 will 疑問文のペア演習 ②本文の音読ワーク ②本文板書
13	②ペアで本文の音読ワーク ②助動詞 will ②新出単語の単語ワーク ②本文の音読ワーク
14	②・助動詞 will 否定文のペア演習 ②本文の音読ワーク ②本文板書 ②本文内容をから野生動物の保護や環境保護についての意見をペアで考え発表することで、本文の理解を深める
15	②be going to の解説とペア演習 ②新出単語の単語ワーク ②本文の音読ワーク
16	②be going to のペア演習 ②本文の音読ワーク ②本文板書

### 3.7. #2～8で導入したピア・サポートプログラム

#### ①傾聴スキルの導入

生徒にとって、学習上分からないことや悩んでいることを相談することはためらうことが多い。特に、学習に苦手意識を持っている生徒にとって、わかりにくい内容に向き合うことはかなりの苦痛をとまなう。人間関係上の良さだけでは、なかなか解決しない現実がある。そこで、傾聴スキルでの具体的な聴き方のスキルだけでなく、聞く際の姿勢を良くしていくことで、協同学習がしやすい環境にしていくことをねらいとした。

人の話の聞き方のスキルとして、FELOR モデル(Cole.T. 1997)を実施した。FELOR はそれぞれ、Facing (顔を向ける)、Eye-contact (相手の目を見る)、Lean (体を傾ける)、Open (心を開く)、Relax (リラックスして)を表したものを示している。そして次の3つの聞き方<気乗りしない聞き方、高圧的な聞き方、前向きな聞き方>の違いをロールプレイングで演じ、考えさせた。

#### ②プラスのストローク

プラスのストロークは、達成や成功を褒めることだけでなく、間違いや失敗に対して温かい声掛けや心遣いをするためのスキルとして活用させることをねらいとして、導入する。このスキルに基づいた声かけができるようになれば、間違いや失敗を恐れずにチャレンジする姿勢ができ、互いの成功を喜びあえる関係ができてくる。

### ③対立問題を解消するスキル学習の導入

ALSの法則とは、話し合いのルールづくりをお互いに合意してから話し合いを進める方法である(Brown, D. 1998)。ALSはそれぞれの頭字語で、“Agree”(同意する)、“Listen”(聞く)、“Solve”(解決)を意味している。本研究では、2人組が協同で相談して進めていくペア学習を導入している。そのため、合意形成をしやすくするスキルとして、この手法を導入した。

#### 3.8. 単元導入に当たっての留意事項

ペアワーク導入の留意事項として、次の3点を設定した。

a 授業ではピア・サポートのワークを活用し、互いに協同して英語学習を進めていくことを目指す。

b ペアワークでは、英語学習がコミュニケーションのよい機会となるよう、課題を設定して進める。

c 教師は、双方のコミュニケーションが活性化し、ペア同志の協同学習が円滑に進むよう、最低限の助言にとどめた関わりを行う。

#### 3.9. 効果測定用具

一連の授業の効果を測定するために、石井ら(2009)が作成した「6領域学校適応感尺度(ASSESS: Adaptation Scale for School Environments Six Spheres)」を使用した。

実施時期は、一連の授業前(＃1)と全授業終了(＃16)後の2回。生徒には、英語授業に関するアンケートであることを説明した上で実施した。項目内の「学級」は英語の授業とし、「先生」は英語担当教員に読み替えるように説明した。

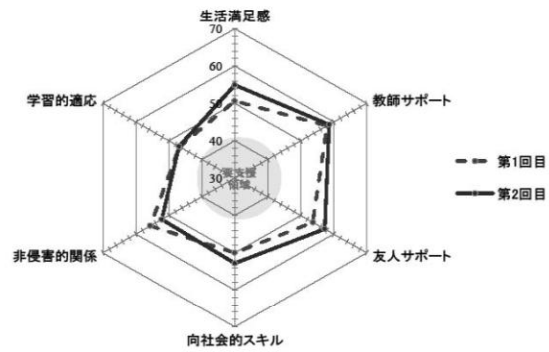
## 4. 結果と考察

### 4.1. 6領域学校適応感尺度(以下、ASSESS)からみた学級全体の変化

下記の表2とグラフは、対象学級で行った結果である。全体をみると、学習的適応は平均よりも低く、あまり変化がみられなかった。しかし、その他については改善がみられた。以下に、適応次元ごとに若干の考察を行う。

表2 学級平均票  $n=35$

適応次元		第1回目	第2回目
対人的 適応	生活満足群	51	55
	教師サポート	58	59
	友人サポート	54	57
	向社会的スキル	50	53
	非侵害的關係	56	52
学習的適応		47	47



#### ① 生活満足感の向上

2か月余りの取り組みの中であるが、生活満足群が、学級平均で(51→55)と4ポイント上昇した。主な質問項目は、「生活がすごく楽しいと感じる」「自分はのびのびと生きていると感じる」などである。

協同学習の導入以前までの授業形態は、一斉形式の授業であったが、本実践のピア・サポートのプログラムの導入後、戸惑いながらもペア学習に移行して学習に取り組むことができたことが、学級での適応感を上昇させる要因になったと考えられる。

#### ② 対人的適応における変化

対人的適応においても、おおむね良好な変化がみられる。以下に、それぞれについて考察する

##### <教師サポート>

質問項目は、「担当の先生は信頼できる」「担当の先生は、困ったときに助けてくれる」などで、(58→59)と1ポイントの上昇であった。生徒たちは、これまで一斉授業に慣れ親しんできたが、本実践のように新しくペア学習を導入しても、生徒にとっては違和感なく実施できたことを示しているものと思われる。

##### <友人サポート>

質問項目は、「元気がないとき、友だちはすぐに気づいて声をかけてくれる」「いいね、すごいねと言ってくれる友だちがいる」などで、(54→57)と3ポイント上昇している。協同学習でのグループがうまく構成され、良い働きかけがされているかどうかの数値で表されていると考えられる。授業者の感覚としても、ペアでの学習が進めやすかった。学級担任との情報交換では、生徒同士の関係性が深まってきているとの情報を得た。

##### <向社会的スキル>

質問項目は、「困っている人がいたら、進んで助けようと思う」「落ち込んでいる人がいたら、その人を元気づける自信がある」などで、(50→53)と3ポイント上昇している。

人を元気づけるピア・サポートのスキルトレーニングと、その実践としての英語の協同的な学びの結果が数値で現れたものと分析される。



<非侵害的關係>

質問項目は、「友だちから無視されることがある」「仲間に入れてもらえないことがある」などである。この項目のポイントが、(56→52)と減少したことは、何らかの非侵害的關係が見られたことを表している。

表3に、同ポイントが低下した生徒10名すべてを、英語の勉強が「比較的できる生徒」と「比較的苦手な生徒」に分類し、それぞれの低減ポイントに入るかを示した。

表3 「勉強ができる」生徒と「苦手」な生徒の低減ポイント領域

	0-9	10-19	20-29	30-39	40-
勉強できる	-	3	1	-	1
苦手	1	4	-	-	-

これをみると、「勉強ができる」生徒に非侵害的關係のポイントが著しく低下していることが分かる。現に、授業後の感想で、「(ペアの)相手が勉強が苦手で、学習での困難が多かった」「相手の遅刻や欠席があり、臨時にペアを組むことが多かった」「相手が寝ているときがありペア学習に何も取り組めないことがあった」などの不満をあげ、「ペアを替えて欲しい」と訴えた学生もいた。(後述する※3(5)女子生徒)「苦手」な生徒は、ポイントの減少幅は少ないものの、ペア学習や英語の授業に否定的であったり、学習が不活発であったりするなどの傾向が見られた。

このように、特に英語科の学習においては、学力差がペア学習に色濃く反映されていることが浮き彫りとなった。

③学習的適応の変化

質問項目は、「授業が分からないことが多い」「勉強の問題が難しいとすぐにあきらめている」などである。(47→47)と変化はみられなかった。

ただし、本実践の間、2回の定期テストを行ったが、学年平均よりも平均点が12点上がった。平均点をもって単純に学力の向上につながったと結びつけることはできないが、特筆すべきことであった。しかし、教科学習は積み上げであり今後も繰り返し継続した実践が必要であろう。

4.2. 「要支援生徒」の変化

図1, 2は、それぞれ授業導入前と後の学級内分布表である。また、表4は、授業導入前後のそれぞれの人数を示している。「要支援生徒」がほとんどいなくなり、新たに、「③対人面で支援が必要な生徒」1名が要支援生徒に挙げられている。

表4の表中、※1~※4の生徒の特徴的な変化について、以下、若干の考察を試みる。

①※1<(23)女子生徒>…ペアが学校生活やクラブ活動で仲良く過ごせる相手となり、学習面でも支援

を受けやすくなった。協同学習後は、授業を受ける姿勢が極めて積極的になった。友人サポートが64→83、教師サポートが59→83に上昇。学習的適応も48→55に上がった。

<※1(29)男子生徒>…本授業実践導入前は、決して熱心な生徒ではなかったが、協同学習を導入してからペアの相手に熱心に教えようとする姿勢が目立った。授業も積極的に受けるようになった。学習的適応が45

→57に、生活満足感も27→41と上昇し、大きな変化が見られた。

②※2<(33)女子生徒>…英語がかなり苦手な生徒である。学習的適応は31→31と変わらないが、導入以前は、机間巡視する教師に質問をして、学習内容を尋ねたりしていた。質問できなければ、学習に取り組めないこともあった。導入後はペアに尋ねたり、教えてもらったりして、生活満足感が(38→58)と大きな変化

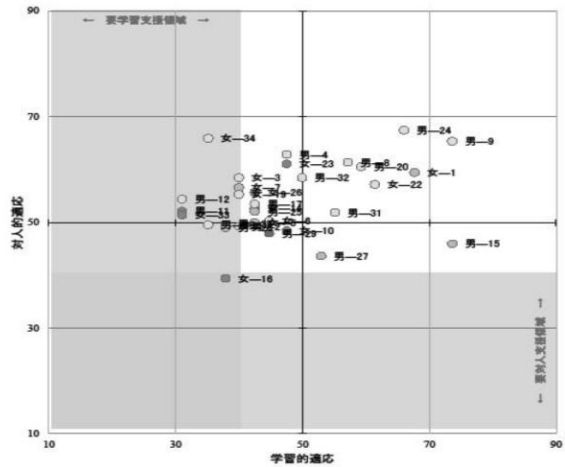


図1 授業導入前の学級内分布表

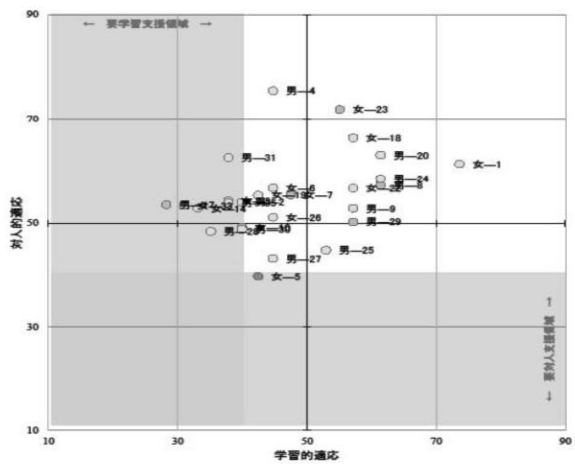


図2 授業導入後の学級内分布表

表4 「要支援生徒」の変化

	授業導入前		授業導入後	
	人数	要支援	人数	要支援
①学校に適応している生徒	19	4 (※1)	16	0
②学習面で支援が必要な生徒	11	2 (※2)	10	0
③対人面で支援が必要な生徒	0	0	1	1 (※3)
④対人面・学習面ともに支援が必要な生徒	1	1 (※4)	0	0
⑤学校外環境(例えば家庭)に問題のある生徒	0		0	

を見せる。友人サポート(54→64)、教師サポート(42→46)、非侵害関係(59→49)と変化し、要支援生徒から外れたが、学習への支援が今後とも必要な生徒ではある。

③※3<(5)女子生徒>…本授業導入前には、要支援が必要とされる生徒ではなかったが、対人的適応(教師サポート、友人サポート、向社会サポート)が大きく下降した。特に、友人サポートが(49→29)と20ポイント減少している。それを裏付ける理由として、「ペアの相手を替えてほしい」と訴え、その理由を尋ねると、教える側でなく「教えてもらう側」でいたいということであった。授業中、協力的に学習しようとする姿勢に乏しく、生活満足感、向社会的スキルは10ポイント減少してそれぞれ、(45→37)、(46→35)となった。友人関係構築への支援と個別の支援が必要であろう。

④※4<(16)女子生徒>…本授業導入前のアンケートのみ答えており、導入後はアンケートを受けていない。教師サポート、非侵害の関係については、別に問題はない。ただ、友人サポート(36)、向社会的スキル(31)、学習的適応(38)と低く、対人面、学習面に支援の必要な生徒である。

#### 4.3. 全体的考察と今後の課題

ピア・サポートを活かした協同学習を導入することによって、声をかけ合うことが多くなり、お互いに教え合う場面がしばしば見受けられるようになった。その結果、一斉指導では得られなかった、生徒同士のコミュニケーションが活発となり、そこで交わされるコミュニケーションの質も、お互い尊重しあう思いやりのある言葉がけに変化していった。学習意欲の向上にもつながり、意欲的な学習をするようになったように思われる。

学校の教育課程の大部分は、教科学習の時間が一番多く占めている。それらの時間にこそ、良質なコ

ミュニケーションでもって人間的交流が深められていくなれば、子どもの心理面、社会面の発達はもとより、学習面、進路面にも大きな影響を及ぼしていくであろう。いわゆる、人格の形成に大きく寄与することは間違いないであろう。しかし反面、生徒間の学力差が大きい場合、ペア学習のモチベーションが下がり、少なからず人間関係に影響を及ぼしかねないことも分かった。

今後の課題として、生徒たちが輝く授業をさらに検討していくために、生徒同士が有機的なつながりをもってお互いに高め合う学習を展開していきたいと思う。

#### 謝辞

これまで私の授業と一緒に学んでくれたすべての生徒たちにまずは感謝申し上げます。共に学んでくれる生徒たちがいたからこそ、本研究に至ることができたと思う。今後も、より良い授業を目指して頑張っていきたい。最後に、「奈良教育大学ピア・メディアーション研究会」で、様々な熱い議論と一緒に繰り広げてくれたメンバー全員に感謝申し上げます。

#### 参考・引用文献

- Brown,D. (1998) *Creative Conflict Resolution, A Training Manual, The Continuous Learning Curve, Canada.*
- Cole,T. (1997) *Kids Helping Kids, Peer Resources, Canada* (バーズ亀山静子・矢部文訳 2002 ピア・サポート実践マニュアル 川島書店)
- 石井真治・井上弥・沖林洋平・栗原慎二・神山貴弥 (2009) 児童・生徒のための学校環境適応ガイドブックー学校適応の理論と実践ー協同出版
- 池島徳大・竹内和雄 (2011) ピア・サポートによるトラブル・けんか解決法！指導用ビデオと指導案ですぐできるピア・メディアーションとクラスづくり。ほんの森出版
- 中嶋洋一 (2000a) 英語授業改革双書 32 英語好きにする授業マネジメント30の技。明治図書
- 中嶋洋一 (2000b) 英語授業改革双書 36 学習集団をエンパワーする30の技。明治図書
- 中嶋洋一(2002) 総合的な学習につながる 中嶋洋一の子供が輝く英語の授業1～6(DVD)。学研
- 三浦孝・中嶋洋一・池岡慎 (2006) ヒューマンな英語授業がしたい！ーかかわる、つながるコミュニケーション活動をデザインするー。研究社
- 佐藤学(2000) 授業を変える 学校が変わる。小学館
- 田尻悟朗 (2009) 英語授業改革論。教育出版